

令和 2 年 5 月 14 日現在

機関番号：26401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K17515

研究課題名(和文) 神経性やせ症患者の身体感覚の回復に向けた、精神看護ケアガイドライン

研究課題名(英文) Psychiatric Nursing Care Guidelines for Restoration of Body Experiences for Neuropathic Patients

研究代表者

井上 さや子 (Inoue, Sayako)

高知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：30758967

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：文献検討の結果、研究の目的を「神経性やせ症をもつ人はその過程においてどのような身体体験をしているのか」に変更した。当事者4名に半構成的面接を行い、質的に分析した。その結果、神経性やせ症をもつ人が体験している身体体験として【感情的態度の表れ】【おかしさへの気づき】【変化の感覚への怖れ】【回復の感受】の4カテゴリーと18サブカテゴリーが明らかになった。

この結果より、【おかしさへの気づき】と【変化の感覚への怖れ】の間で患者が揺らいでいる時は、行動的事実に焦点を当てた支持的な姿勢を保ち、患者の状況は自分の力で歩んでいるのだと理解することで、巻き込まれないことが重要である等の看護が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、神経性やせ症をもつ人の体験を明らかにした数少ない学術的研究である。

また、「身体体験」という概念を用いることで、心身相関を意識した新たな看護の視点を看護学に提供したと考える。さらに、臨床の看護師からイメージが付きやすい、ケースの理解に役立ったと意見をいただいており、社会にも還元できるものである。

研究成果の概要(英文)：As a result of the literature review, the purpose of the study was changed to "What kind of body experience does a person with neurogenic leanness experience during that process?" In this research, we interviewed 4 anorexia nervosa patients to generate the most obvious body experience symptoms. 4 main categories of body experiences were 'manifestation of emotional attitude,' 'awareness of some irregularity,' 'fear of a sensation of change,' and 'acceptance of recovery,' which could be classified into 18 subcategories.

As a nursing suggestion, when a patient fluctuates between 'awareness of some irregularity' and 'fear of a sensation of change', maintain a supportive attitude focused on behavioral facts. Understanding that she is walking on her own, suggested that nursing should not be involved.

研究分野：精神看護学

キーワード：神経性やせ症 身体体験 看護 身体感覚

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

摂食障害は10代～20代の若年女性に多いが、10年以上の長い経過を辿ることも増えている²⁾。特に神経性やせ症は、栄養障害や自殺によって亡くなる患者が15%以上に上るとの調査結果¹⁾もあり、効果的なアプローチの開発は社会的にも重要な課題である。しかし、摂食障害に関する文献は、他の精神疾患と比べて極めて少なく、エビデンスレベルの高い看護介入は世界的にも明らかにされていない⁴⁾⁵⁾。

精神分析学の父であるFreudは、性的発達理論において、身体機能の発達とこころの成熟の関連をすでに指摘しており、「自我は、究極的には主に身体表面から誘出される身体感覚から導き出されたものである」⁹⁾と述べている。哲学者のGallagher¹⁰⁾は、自己を「過去から未来に渡って永続的に存在する自己」と「現在の、一時的な自己」から成ると考えている。「過去から未来に渡って永続的に存在する自己」は、アイデンティティのようなものである。「現在の、一時的な自己」とは、行為を自分自身が行っているという感覚と、行為は自分の身体で行われているという感覚の2つの感覚からなる。「現在の、一時的な自己」の積み重ねが「過去から未来に渡って永続的に存在する自己」へと繋がると考えられていることから、身体感覚を含めた「いま、ここ」の感覚を取扱い、変化を追っていくことが自己へのアプローチとして重要だと考える。

これまでのように身体感覚の回復を栄養状態の改善にのみ頼るのではなく、日常的な援助の中で身体感覚を取扱い、回復を促進することが、神経性やせ症患者にできることであり、中でも、患者への身体的介入を多く行い、日常生活に関する相談を受ける、援助するなど日々介入を行う看護師は、精神療法や診療の中で行われている介入とは違った独自の介入が行われていると期待できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、『神経性やせ症患者の身体感覚の回復に向けた精神看護ケアガイドライン』の作成を目指して、神経性やせ症患者の身体感覚の回復に向けた看護の要素を検討することである。そのために、～の目標を持つ。「患者は回復過程においてどのように身体感覚を回復していったのか」を明らかにする。「看護師は患者の身体感覚の回復体験を知り、これまでの介入を『身体感覚の回復』という現象でどう捉え直し、実施した看護ケアを語るのか」を明らかにする。この2つの研究を基盤研究として、患者の身体感覚の回復を促進するには、どのような看護ケアを行えばよいのかを検討する。身体感覚の回復を促進することは、自我・自己の安定を促進することである。つまり、本研究を行うことで、看護師が行う身体介入や日常生活支援に潜在する自我・自己を安定させるケアを掘り起こすことができる。また、心身関連の考え方を反映した看護ケアの発展に貢献するものと考えられる。

3. 研究の方法

ステップ1【神経性やせ症患者への面接調査 - 身体体験に関する抽出と分析】

データ収集方法：患者の手記などを含めた、更なる文献検討を行い、半構成的インタビューガイドを作成した。そして、外来通院している神経性やせ症患者を対象に、発症後の経過に沿って、身体の変化を尋ね、その時の感覚やイメージ、身体に対する感情や態度を中心に語ってもらった。身体体験とは、その人が感じた身体感覚、ボディサイズの知覚などの「いま、ここにある」感覚を、自分なりに感じ、意味づけること、とした。

データ分析方法：面接終了後、面接内容の逐語録を作成した。ケース毎に経過に沿って体験を整理し理解を深めた後、逐語録に戻り、身体感覚ならびに身体の受けとめに着目して身体の体験を表している部分を抽出し、カテゴリー化を行った。カテゴリーの定義をする中で類似するカテゴリーがないか確認し、洗練化を行った。

対象者：関東圏・四国圏内の当事者4名

ステップ2【神経性やせ症患者の身体体験に対する看護師の捉えと実施したケアの抽出と分析】

データ収集方法：ステップ1の研究結果をもとに、半構成的インタビューガイドを作成した。そして、神経性やせ症患者へのケア経験を持つ精神科看護師に対し、個別面接を実施した。面接ではステップ1の研究結果1の内容を共有し、思い浮かんだケースを語っていただき、看護師が捉えていた患者の身体体験、看護師が行ったケアに焦点を当てながら進めた。

データ分析方法：面接終了後、面接内容の逐語録を作成した。逐語録より、看護師が捉えていた患者の身体体験、看護師が行ったケアを抽出し、類似したコードに分類、テーマ化を行った。

対象者：国内の精神科看護を専門とする看護師3名

ステップ3【神経性やせ症患者の身体感覚の回復に向けた看護の要素の検討】

ステップ1で検討された「神経性やせ症患者の身体体験」のプロセスとステップ2で抽出された「身体体験に対する看護師の捉え」と「捉えた身体体験に対して実施したケア」を比較し、患者の身体体験のプロセスに沿った捉えとケアだったのか検証する。そして、身体感覚の回復に向けた看護において重要な要素と考えられるものを考察した。

4. 研究成果

ステップ1

研究協力者は女性4名で、年齢は20歳代2名、50歳代2名であった。4名とも現在の診断名は神経性やせ症だが、うち2名が、過食期を経験していた。発症時期は、3名が10代で、1名が40代だった。神経性やせ症をもつ人が体験している身体体験は、【感情的態度の表れ】【おかしさへの気づき】【変化の感覚への怖れ】【回復の感受】の4カテゴリーと18サブカテゴリーに分類された。以下に【カテゴリー】の定義とサブカテゴリー名を示す。

【感情的態度の表れ】とは、自分に生じている身体感覚を、患者独自の感情的態度で受けとめる体験である。このカテゴリーには、《今の身体は全く評価できない》《苦しさをぶつけて快感を得る》《身体でしんどさを訴える》《休むことは身体に許さない》《不快な感覚は否認して感じない》の5つのサブカテゴリーが含まれた。

【おかしさへの気づき】とは、食べる - 食べないに囚われた生活を継続することで生じた身体のおかしさに身体感覚を通して気づく体験である。このカテゴリーには、《身体の不調に気づく》《こころと身体のつながりの感覚が乱れていることに気づく》《社会生活に必要な体力と知力の不足に気づく》《身体を制御できない》《動けない状態までいってしまう》《自分の身体と摂食障害のイメージを結びつける》の6つのサブカテゴリーが含まれた。

【怖れを伴う変化の感覚】とは、受療や摂食行動により生じる身体的な変化を怖いという感覚とともに捉える体験である。このカテゴリーには、《増えるのも減るのも怖い》《勝手に体重を増やされることに抵抗を感じる》《病気を手放すことに躊躇する》の3つのサブカテゴリーが含まれた。

【回復の感受】とは、感じている身体感覚の変化に対し、痩せたい思いがひつつきながらも、当たり前前の身体になることに価値を見出し、受け入れる体験である。このカテゴリーには、《悩んでいた体調が軽減する》《感覚・イメージをとりもどす》《健康の基準ができる》《太らないと実現しない希望や目標ができる》の4つのサブカテゴリーが含まれた。

本研究からは、【感情的態度の表れ】から見える病理の深さ、【おかしさへの気づき】と【変化の感覚への怖れ】の循環、【回復の感受】へのつながり難さと完全回復することへの許せなさの3点が考察された。本結果は2020年6月発刊の学会誌に掲載される予定のため、詳細はそちらを確認いただきたい。

ステップ2

研究協力者は3名の女性の精神科看護師で、専門看護師を5年以上経験している専門性の高い看護師だった。【おかしさへの気づき】と【変化の感覚への怖れ】の循環の時期は途方もなく長いので、苦しみに理解を示しながら「待つケア」が重要であること、看護師の中でも役割を取り「ただ支持的にならないケア」を行うことについて意見が出た。また、この時期は看護師との関係性を崩しやすく、寄せ付けない態度になった患者の「鎧を脱がせる」「悪口を吐き出しても騒がない」「自分との体験の違いを楽しむ」などの具体的なケアも抽出された。

ステップ3

- 「不安の大きさを知る」患者の用いている防衛機制の大きさを知ることで理解する
- 「身体体験の違いを楽しむ」問題行動が身体体験の違いからくるものだと理解し楽しむ
- 「苦しみの循環から抜けるのを待つ」

以上3つが神経性やせ症患者の身体感覚の回復に向けた看護の要素と考えられた。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：知ることからはじめようみんなのメンタルヘルス, http://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_eat.html (検索日2020.5.14)
- 2) 中井義勝：摂食障害の疫学, 医学のあゆみ, 241(9), 671-675, 2012
- 3) 野間俊一：摂食障害の病理の理解, 精神科臨床サーブス, 15(3), 288-292, 2015
- 4) 中里道子：摂食障害の基礎と臨床 摂食障害の精神療法, 脳, 21, 18(2), 181-188, 2015
- 5) 石川俊男, 田村奈穂：摂食障害の治療・研究の最近の動向について, 心身医学, 54(2), 122-127, 2014
- 6) 下坂幸三：摂食障害治療のこつ, 金剛出版, 2001
- 7) Christopher G. Fairburn: Cognitive Behavior Therapy and Eating Disorders, 切池信夫監訳, 摂食障害の認知行動療法, 医学書院, 2010
- 8) 田中彰吾：身体イメージの哲学: Clinical Neuroscience, 29(8), 868 - 871, 2011
- 9) Freud, S.: 井村恒郎訳, フロイト著作集 自我論・不安本能論, 人文書院
- 10) Gallagher, S.: Philosophical conceptions of the self: Implications for cognitive science. Trend in Cognitive Sciences, 4, 14-21, 2000

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 井上さや子、畦地博子	4. 巻 45
2. 論文標題 神経性やせ症をもつ人が体験している身体体験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知女子大学看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Sayako Inoue, Hiroko Azechi
2. 発表標題 Bodily Experiences of Anorexia Nervosa Patients : Preliminary research for the nursing care guidelines
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井上さや子、畦地博子
2. 発表標題 若年の神経性やせ症をもつ人への看護の検討：身体への態度の変化と感情を一連で理解する患者理解の必要性
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第30回
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----